

# それでも紙で伝える理由

——「伝えること」の新しい輪郭をたどる

インタビュー

## 中西功

ブックカルチャークラブ主宰



ブックカルチャークラブの中西氏。  
ブックマンションの店内で。

大谷みさ子 執筆

古里麻衣 撮影

手づくりの冊子「ZINE(ジン)」を持ち寄る展示即売会。ZINEフェスが全国で開かれ、静かな広がりを見せている。そんな動きを支えているのが、ブックカルチャークラブを主宰する中西功氏だ。〈作る〉〈刷る〉〈売る〉〈集う〉という一連のプロセスを通じて、本や印刷文化を媒介とした多様な表現を支える中西氏の活動からは、デジタル全盛の今、なぜ人々は紙という手段を選び、どのように信頼を築こうとしているのか、その背景にある動機と社会的な文脈が見えてくる。情報があふれる現代において、手渡しだからこそ育まれる「伝わり方」と、紙メディアが担う新たな役割を探る。

### 手づくり冊子「ZINE」が集まるフェスが今ブームに

東京浅草・浅草寺にほど近く、観光客で賑わうエリアの一角にある都立産業貿易センター台東館。2025年6月、ここで開かれていたのは「ZINEフェス東京」だ。2フロアを使い、ZINEと呼ばれる手づくり本や冊子、さらに関連したグッズ類などが所狭しと並べられ、開場直後から早くも熱気が充満している。また、売り手が同時に買い手でもあるためか、来場者どうしのニッチな会話があちらこちらから聞こえてくるのが面白い。

冊子をいくつか手にとってみる。たとえば、紙メディアに関わるさまざまな場や仕組みを手がけてきた人物だ。その活動の広がりからはやや意外に感じられるかもしれないが、中西氏の出発点はデジタル中心の世界にあった。

2003年に大手IT企業に入社し、主にEC「\*1」コンサルティングなど営業の仕事を第一線でこなしていたそうだ。デジタル中心の世界から紙メディアというアナログなものを扱う世界に飛び込むことは、それまでとはまったく異なる思考と手間のかかる作業が必要になるようにも思えるが、「ご本人にそれを問うと、「僕のいた部署では、何か一つの事業を始める前に、メンバーの多くがそれぞれ関係する紙の本を何十冊も購入して読んで準備をしていました。僕も電子書籍ではなくずっと紙の本を資料として買い集めて読んでいたので、その頃から自宅に本が集まり始めました」と現在の活動のベースとなる紙メディアとの接点に触れ、さらにこうも話す。

「何かのアイデア出しの際には、まず手を動かして、とにかくノートに書き出すのが当たり前でした。アイデアが出ないと、上司からは『まずは手を動かせ』とよく言われて。最初は逆なんじゃないかと思いましたが、なんでもいから手を動かして書いてみると、だんだん全体像が見えてくる。手で書くのは遅いし面倒くさいのですが、それぐらいの速度感が思考にはちょうどいいんじゃないかと思っています」

さらにChatGPTのような生成AIについて



ZINEフェスに並ぶZINEの一例。個人の想いや趣味が自由に表現され、多様な世界観を見せている。

横浜・崎陽軒のシウマイ弁当の具材の食べる順番を真面目に検証した冊子『食べ方図説 崎陽軒シウマイ弁当編』や、公園の懐かしき漂う遊具を夜な夜なこっそりカメラに収めた写真集『公園遊具』などマニアックなものから、保育園から高校まで一緒に過ごした親友との日々の思い出を文章と漫画にまとめた『曲がり角のふたり』、自身のあまり解明されていない病理について綴ったエッセイ『化学物質過敏症の記録』など私的でまさに手づくり感あふれる小冊子も多くみられた。いずれも自分の言葉で、自

分の手で綴られており、そこには自分の興味や感じていることをそのままダイレクトに伝えたい、伝わってほしいという動機があるようにも思えてくる。

そもそもこの「ZINE」。あまり耳馴染みのない言葉だが、これはMagazineのzineから派生しており、ある特定のモノやコトへのファン(好き)をまとめた冊子「ファンZINE」がルーツとも言われている。古くは同人誌やミニコミ誌と呼ばれていたものや、よくニュースなどでも取り上げられている漫画やアニメなど二次創作を主体としたコミケ(コミックマーケット)をイメージしてもいいのかもしれない。ただし、それらは文学やアニメといった特定のジャンル分けがされているが、ZINEの場合は、2010年頃からジャンル無し、さまざまな少数の手づくり冊子の総称として位置付けられるようになった。そしてこのフェスのように関連するイベントなども日本各地で広く開催されるようになってきている。本もデジタルが主流となるなかで、今なぜあえて「紙」なのだろうか？

### IT企業もデジタルではなく紙メディアを活用

ZINEフェスを主催する中西氏は、これまで無人古本屋「ブックロード」、シェア型書店「ブックマンション」、そして少数印刷専門の印刷所「ZINEファームトウキョウ」など、

も「反応が速すぎる」と違和感を感じることもあるという。

「ちょっと間があったほうが、脳の問題として受け入れやすい気がしています。まず観察をして、スケッチみたいにキーワードを書き出して、コピーでも飲みながら考えて、組み替えていく——そういう時間がやっぱり必要なんだと思います」。生成AIに限らず、デジタルならではの伝達速度や膨大な情報量に戸惑いを感じる人も少なくない。思考をめぐらす時間は確かに必要のようだ。

### 本との新しい出会い方 無人販売からシェア型へ広がる仕組み

IT企業時代に集めた本は増え続け、家の空間を圧迫、地震への不安もあり、「何とかしなければ」と考えた末に思いついたのが、無人古本屋「ブックロード」だったという。「仕事しながらでき、本屋にかける時間も固定費も抑えたいという思いがあって、スモールスタートをするためには無人だったらできるのではないか」と思い始めたそう。

東京郊外のJR中央線三鷹駅から徒歩13分。武蔵野市の商店街の一角にある2坪ほどの小さな空き物件を見つけ、2013年に自宅にあった蔵書1000冊ほどを並べて営業を開始した。無人販売の方法としてカプセルトイの仕組みを取り入れ、購入者が袋入りのカプセルを購入し、その袋に好きな本を入れて持ち帰るというスタ

イルを採用した。これにより「周りにお金を払わず持ち帰っていると疑われるのでは？」といった不安材料がなくなり気軽に購入ができるというわけだ。無人販売にありがちなトラブルなども特になかったという。

「持ち逃げみたいなこともなかったですね。かって無人だからこそ機能する部分があった、たとえばカプセルトイが詰まっていたのでお金置いておきましたとか、活動を支援しますと手紙を書いてくれる人、なかには体に気を付けてと青汁を置いていってくれる人までいて(笑)。無人だからこそ周りを気にすることなく、自分が思ったことを素直に書いたり行動にできる場所だったんだと思います」と中西氏。当時は地域の個人書店の減少が問題視され、本の無人販売の形態自体も珍しく、マスコミでも大きく取り上げられた結果、多くの人が知ることとなり遠方からわざわざ訪れるなどお客が集うようになっていく。

そして、そこからつながったのが「ブックマンション」という構想だ。三鷹に隣接する吉祥寺に2019年にオープンした、いわゆる棚貸しをするシェア型本屋というスタイル。一冊月3850円の会員制で、自分の好きな本などを自由に置くことができ、現在は約80名の会員がいる。

「ブックロードでお客さんとやりとりをするうちに本屋さんをやりたいと思っていてる人がとても多いと感じていて、それならみんな本屋さ

2300名超えの来場者があったことで話題を呼んだ。

全国各地からの引き合いも殺到しており、中西氏は現在、年間30回程度全国の会場へ足を運んでいるという。この運営をほぼ一人で行っているというのだから驚きだ。そこには中西氏が軸とする吉祥寺の街に根付く小商い(スモールビジネス)を意識したしかけがある。

「他の同様のイベントにはないスタイルだと思いますが、出店者それぞれの方に30分間運営のお手伝いしてもらっています。お金をもらう人、チラシを配る人、リストバンドを渡す人と役割を決めて、3人で入り口に並んでもらうだけ。あとは特に説明はしないので、最初はみんな驚きますね」と中西氏。もちろんこの簡単な仕組みとスタイルは中西氏の負担軽減のためだけに行われているわけではない。

「そこで何が起るかというと、出店者同士とても仲良くなるんです。SNSはゆるいつながらりに近いと思いますが、これもゆるいつながらりではあったり、会った瞬間にめちゃくちゃ濃くなるというか一点突破みたいになって、『連帯感がすごかったですね』って感想を言われることもあるぐらいです」。SNS的な「ゆるいつながらり」でありながら、対面による一時的な協力を通じて、濃密な関係が生まれていく。この連帯感こそ、吉祥寺の街に多く残る小商いから生まれる対話や助け合いの精神に日々触れている中西氏ならではのこだわる部分だ。

そして一番重要なのは「出店者側としてではなく運営者側になると違う世界が見えてくる」ことだという。中西氏いわく、

「出店者の席にいてあまり人が来なければ、それが全体の状況だと考えてしまうかもしれない。でも、会場の入り口に立てば、たくさんの方が来て楽しんでいるのが分かります。出店者側の場で見える世界と入り口で全体を見渡して見えてくる世界、どちらも見られることができると重要で、俯瞰して立体的に見ることができるよう、そこは意識してやっていますね」



開場直前のZINEフェス東京の会場(2025年6月)。多くの出店者がZINEを並べて準備を整えている。

んをやればいいと、シェア型本屋を思いつきました」。さらに運営自体もみんなシェアするかたちを確立し、パッケージ化すれば全国に広めることができるかと考え「ブックカルチャーラボ」という組織も立ち上げた。

「小売店さんって一人で運営していると全ての時間がそこに行くわけです。本屋も面白いんですが、ずっとやるのは大変ですし、病気などで倒れたら終わり。それが、一店舗に対して関わる人が何十人もいれば一人ひとりの負担は少なくて運営できるじゃないですか。僕がいなくてもお店は回っていくし、調子が悪ければ代わってあげるとか、一人の子どもを地域のみんなで見守ろうというのと同じで、そちらの方が多分ストレスがかからないですよ」。中西氏の取り組みは、無理をせず、自分の「好き」を持ち寄って支え合う構造を軸にしている。

### 出店者が運営者にもなる 「ZINEフェス」のこだわり

ごく自然なかたちで活動の場を広げていく中西氏。「ZINEフェス」もやはりその延長線上にある。「ブックマンション」を訪れた美大生との話から、初めてZINEの存在を知り、その面白さと先への可能性を感じ即座に活動を開始した。2021年3月に地元吉祥寺で第1回の「ZINEフェス」を開催。以降、参加者は年々増加の傾向をたどり、今年1月のイベントでは過去最高の550組、700名が参加

確かに自分が好きなものをつくるというだけでは、独りよがりにもなりがちだ。視野が広くなれば自身の本づくりへの姿勢や人々に読んでもらうための表現のしかたにもそれまでとは違う変化が生まれるのではないだろうか。加えて、自分とは異なる視点や価値観を持つ人々との出会いは、創作活動に新たな刺激と発見をもたらす効果も大きい。そうした多様な交流が、より豊かな表現へと導いてくれるのではないだろうか。

また、それだけではなく、運営のしかたを知ってイベントをやり始めた人も実際に出てきているというから、フェスを継続していくためのビジネス面での利点にもつながっている。

「でも、規模を大きくしようとは思いません。みんなで一緒にできることが重要なので、スモールというよりシンプルなかたちのほうがやりやすいですよ。だからこそ今全国で展開もできているので、拡張性のある小商いを目指しています」。確かにシンプルなかたちであれば、中西氏の「みんなで一緒にできる」という本来の意図も伝わりやすく、そこに賛同してくれるいろいろな地域のいろいろな人がZINEを紹介し、さらに伝えてくれるのではないだろうか。

### 紙が媒介する偶然の出会い 顔が見える営みが生む新しいつながり

シェア型書店「ブックマンション」、そして「ZINEフェス」——それらの場に集う人び

との姿からは、「紙で伝えること」がもつ柔軟さと広がりを見せてくる。そこに共通するのは、自分の「好き」を誰かに伝えたい、伝わってほしいというシンプルな思いだ。

「先ほど本屋をやりたいという利用者が多いと話しましたが、ある女性は最初はあまり開放的な感じではなく、『書庫を借りようと思って』と言っていたので、『本屋さんにしちゃった方がいいですよ』って押ししたら、今すごく素敵な絵本屋さんをやられています。ブックマンションの棚を借りてやってみると面白くて、お店番（ブックマンションでは可能な範囲で年に2、3度1日4時間程度店番をする）も楽しくて、『家の近くでやってみようかな』と言って始められました。その手軽さとか軽やかさって、情報発信の手段が多様化し、副業や個人での活動が当たり前になってきた今の時代だからこそもてるものなのかなと思います」と中西氏は分析する。困難と思われていた本屋になりたいという夢も、中西氏の活動のような今あるシステムを使えば手軽に始めることができる。さらにそこから得た経験から独自の世界にも軽やかに展開しているということなのだろう。

また、利用者の思いはさまざまだが、「基本的には自分の好きな本が誰かに届けばいいという人、本好きな人と知り合いたいという人が一番多い」そうだ。栃木県在住の広島カープファンの男性は、首都圏で語り合う相手がないことから、ブックマンションに関連書籍を



ZINEファームトウキョウの壁に貼られたリングラフ作品の例。インクのにじみやかすれが独特の味わいを生む。

もいい印刷機があるんです。でもそれでつくれる場所がないんです」と相談された中西氏は、「じゃあ僕が一旦購入してやりましょうか」とクラウドファンディングで資金を集め印刷スペースを開設した。

「赤字事業ですけど、こういうつくり方があるんだって分かる場所としてすごく貴重です。ブックロードは本好きな人がいて本屋さんをやりたい人がいるんだってこのを見てもらえらる場所、ブックマンションは本ってこういう楽しみ方がいっぱいあるんだって分かる場所。僕



「ブックマンション」の店内。31cm四方の棚はそれぞれオーナーが異なり、並ぶ本のジャンルはさまざま。新刊・古本だけでなくZINEが並べられた棚もある。

置き、店番を担当する時にはユニフォームを飾ったり、球団の応援歌を流したりして活動している。SNSでその様子を知った中学生が「会って話してみたい」と訪ねてくることもあったという。年齢も立場も違うふたりが、棚をきっかけに出会い、語り合える——好きを大切にしたい本棚が、その媒介となっている。

さらに、こうした一人ひとりの営みは、「伝える」という行為の新たな輪郭をも描き出す。大量に拡散される情報ではなく、自分の関心や思いをZINEや本、本棚に託し、それが必要なら誰かに届く。そこには、速度や効率とは異なる

が何年間やっても多分到達できないことを普通にやってくれる人たちがいるので、それを見られるのがすごく面白いんです」と中西氏は楽しそうに話してくれた。

こうした環境が整う中、今回のZINEフェス東京では、出店者だけでなく来場者にもZINEや紙というメディアに込めた思いや魅力について話を聞くことができた。とりわけ多く聞かれたのは、「印象に残りやすいのはやはり紙」「アナログの良さに最近気づいた」「SNSで発信した内容を、さらに工夫して別のかたちで表現できる」「ネットでは出会えない。偏愛に触れられるのが面白い」といった声だった。

また、デジタルとの対比で語られることも多く、「ネットでは誰に届いているのかわからないが、ZINEはちゃんと渡った」実感がある。「ブログは100年後に残っている気がしないけれど、紙なら残せる」という声も印象的だった。さらに、「普段会えない人と会えて刺激になる」といった、ZINEフェスというリアルな場がもたらす偶然の出会いを評価する声も聞かれた。

これらの声からは、単なる記録メディアとしてではなく、手に取れる「物質性」や、個人の嗜好が込められた多様な表現、作り手の熱量の高さが評価されていることがうかがえる。ZINEを生み出す過程で、自身の嗜好に向き合い、手を動かしながら誌面をゆっくりと形づ

るかたちで「伝わる」ことへの確かな手応えが存在する。たとえば、顔や名前を明かさないう事柄もあるという。デジタル上では匿名で活動するその人物は、「本屋をやってみたかったが表に立つのは難しい」と話し、紙の本にメッセージを込めて発信を始めた。結果、その世界観に共鳴するファンが本を買いに訪れるようになったという。「好き」の表現や伝わり方が多様になってきたと実感しました」と中西氏は語る。

発信者も受け手も、デジタルとアナログを自由に行き来しながら、それぞれが「自分の好き」をどう伝えるか、どう受け取るかを模索している。興味深いのは、こうした活動に参加する人々の多様性だ。年齢層も職業もばらばらで、普段からSNSを活用している一方で、紙媒体や直接販売を持つ利点を感じ取った人たちが集まってきている。紙だからこそ立ち上がる関係性や伝え方、伝わり方が、ZINEや本というかたちを通して、確実に広がっている。

### ZINEがもたらす しなやかな循環

中西氏は紙メディアを使って伝える手段の後押しをする場として2022年に「ZINEファームトウキョウ」も立ち上げた。これもやはりZINEフェスの出店者の一言がきっかけだったという。「リングラフ」\*3」というとくくっていく——そうした身体性を伴う行為が、デジタルとは異なる「残すこと」「届くこと」のリアリティを生み出し、ZINEというメディアへの確かな信頼感を支えているのだ。

ZINEは、デジタルではすくいきれない微細な感情や熱量を、手触りある紙と対面のやりとりが媒介することで、「伝えること」と「伝わること」のギャップを埋めていく。中西氏の活動は、そのような関係の可能性をひらく装置として機能している。発信する人と受け取る人が、互いに関心や思いをやりとりしながら、その輪が少しずつ広がっていく。ブックマンションやZINEフェスで起こっているしなやかな循環は、情報があふれる時代にあってなお、紙だからこそ生まれる「伝えること」の意味を静かに語っている。

注

- \*1 Eコマース（電子商取引）。
- \*2 バーチャルキャラクターの姿で動画配信を行う配信者。
- \*3 理想科学工業が1980年から販売している事務用のシルクスクリーン印刷機。独特の風合いと色彩表現が可能で、ZINEの制作者に愛用されている。



中西功（なかにし こう）

1978年生まれ。立教大学法学部卒業後、大手IT企業に入社し、Eコマースプラットフォーム企画運営に従事。2013年、東京都武蔵野市に無人古本屋「ブックロード」を、2019年、東京・吉祥寺にシェア型書店「ブックマンション」を開店。2021年より「ZINEフェスティバル」を主催。現在は「ブックカルチャークラブ」を主宰し、本のある空間を増やすことを理念に活動している。